



二月部目録

△印ある能備の  
季と持りの之

○養生の法。雨風の考。木の對  
内。妙菜。その外人家。重宝の  
外。や。物。考。ある。ゆ。ん  
日。報。ふ。い。る。さ。ど

二月

陰陽生  
調子  
異名

柳

驚蟄節

七十二候  
占候

三丁

春分中

七十二候  
天氣占候

三丁

月日令

二月日の定。その。干支の  
さ。ま。ら。ん。こ。と。を。愛。ふ。あ。つ。ひ

中和節

酒

三丁

上春服

吉野餅配

三丁

南二月堂行

秋奠

三丁

初午

水間祭

三丁

東福寺懺法

广耶泰

三丁

初午諸祭

南都春日祭

三丁

江本妙寺詣

大原のホ

三丁



△八幡初卯

踏音節

賜尺

萬神都會

△行基祭

△祈年祭

△若宮能

祇園八講

泉涌寺新開帳

列見

△三月堂水取

△涅槃會

△佛の別

△嵯峨柱炬

△真福寺常樂會

△餅花奠

△貝寄

△浅間祭

△天壽聖靈會

△天神御忌日

△天和の節

三月令

△彼岸

△天王寺祭

△時宗踊念佛

男女嫁娶

得子

鶴鳥の圖

△水口祭

△園韓神示

迎富

蚕農市

△出代

△二日灸

△薪能

△遺教經會

△貴船五穀祭

百花朝

花朝節

△二月の別

△さり佛

△天壽常樂會

△彦山祭

△積塔

觀音誕辰

普賢菩薩

△比良八講

△菜種御供

△道明寺祭

此部は八日の定まりたる二月

彼岸迎僧状

△天王寺踊念佛

△社日

△紙鷲

△初雷

△初霜

△田畑野山焼

△季御讀經

草木類 此部より二月一ヶ月の草木類

△苗代 △同葉更 △種浸 △種粉

湯種 △種ト △種蔕 △種まき

△藍麻 △まき △葎

△蒲公 △草 △杉菜

△狗脊 △草 △枸杞

△五加木 △草 △虎杖

△韭 △草 △蒜 △野蒜

△水葱摘 △草 △薺花

△菜の花 △草 △大根の花

△雙草 △草 △未黒薄

△草芳 △草 △草れ若葉

△救の燒原 △草 △芦角 △芦錐

△角組芦 △草 △芦錐

△若紫 △草 △接骨木花

△銀杏花 △草 △紅梅

告紅梅盛文 △草 △八重梅

△座論梅 △草 △越中梅

△黃梅 △草 △初桜 △初花

△待花 △草 △糸櫻

△姥様 △草 △見様

△一重様 △草 △彼岸様

△熊谷様 △草

△種植 草木のたけなう多う様

△接穂 木をくわへて此下あり

西瓜 △草 △さく木

△やーい △草 △蓮を植

修樹 △草 △葉種根と取

月生類 此部より二月一ヶ月の

果鳥 △草 △知子

△果鳥 △草 △知子

△果鳥 △草 △知子

△果鳥 △草 △知子

△果鳥 △草 △知子

△燕 同樂	△引鶴	△孕雀	△孕鹿	△蜂	△蝶	△蟾蜍	△蛙子	△燕	△塔	△もろこ
△歸雁	△鳥巢	△松尾鳥	△鹿角落	△虫	△蛙	△青蛙	△鮫子取	△田螺	△寄居虫	△馬刀
ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ

△必用 此部ハ風雨の占○破軍の  
 他行の心機○作事のよう○料理  
 今立の法食物のよう○其外  
 品々あり尤日の定つる事ハロの日  
 今の部より此部ハ日のこと  
 二月二月月要用の  
 二月目錄終

二月之部

當月の清風脆月  
 舒して仲陽の氣  
 整野外へ出て  
 青州と踏天  
 氣と專小受  
 術は杖陽の  
 則杖陽の  
 術は草木の  
 日咎とる如く  
 入も日の影と受て



異名

△仲春 △陽中 △智月 △令月  
 △夾鐘 △驚蟄 △春分  
 △小草生月 △梅見月 △雪消月  
 △梅津月 △衣更着

異名註

夾鐘ハ 律の事  
 夾ハ字甲也石の物あり  
 雅曰二月乃如くいつり驚蟄  
 春分のこけハ二丁目あり

蔵玉

小草生月 頭  
 月竹ゆなるむさしのころ

哥 梅はさ月 友則

うぐいこのかよぬ里の若草は  
花雪なる梅つさ月

哥 蔵王梅見月 有家

とみ人しなれあつの梅見月  
風のまこけを結まらるるも

哥 莫情雪消月

よと捨てまらぬえすあまの根の  
ゆきとさ月のはもふれは  
備花のさく木いそりしに二月外考

節 驚蟄。七十二候。草木芽二  
候。昼夜長短日の出入等左記



○枕端の枕の花いらさきとさきも  
○倉庚の鶯の枝をさき 俗はうぐい

このは名とそれとも後之会庚の  
軽鯨ツモエ又カラガヒスとのひと系

大坂の辺に東宮くるとは 大さこ而  
舌のてくさくさいさひとに何と尾

こねとま毛あうつとま毛とス  
ふねと二月うづ知る○鷹ハ

陰類なる梅ハ陽類と仲春の  
さうなるさ感トを陰類の意

も陽類の梅と意とるなり是  
仲表の時といつるなり礼記出

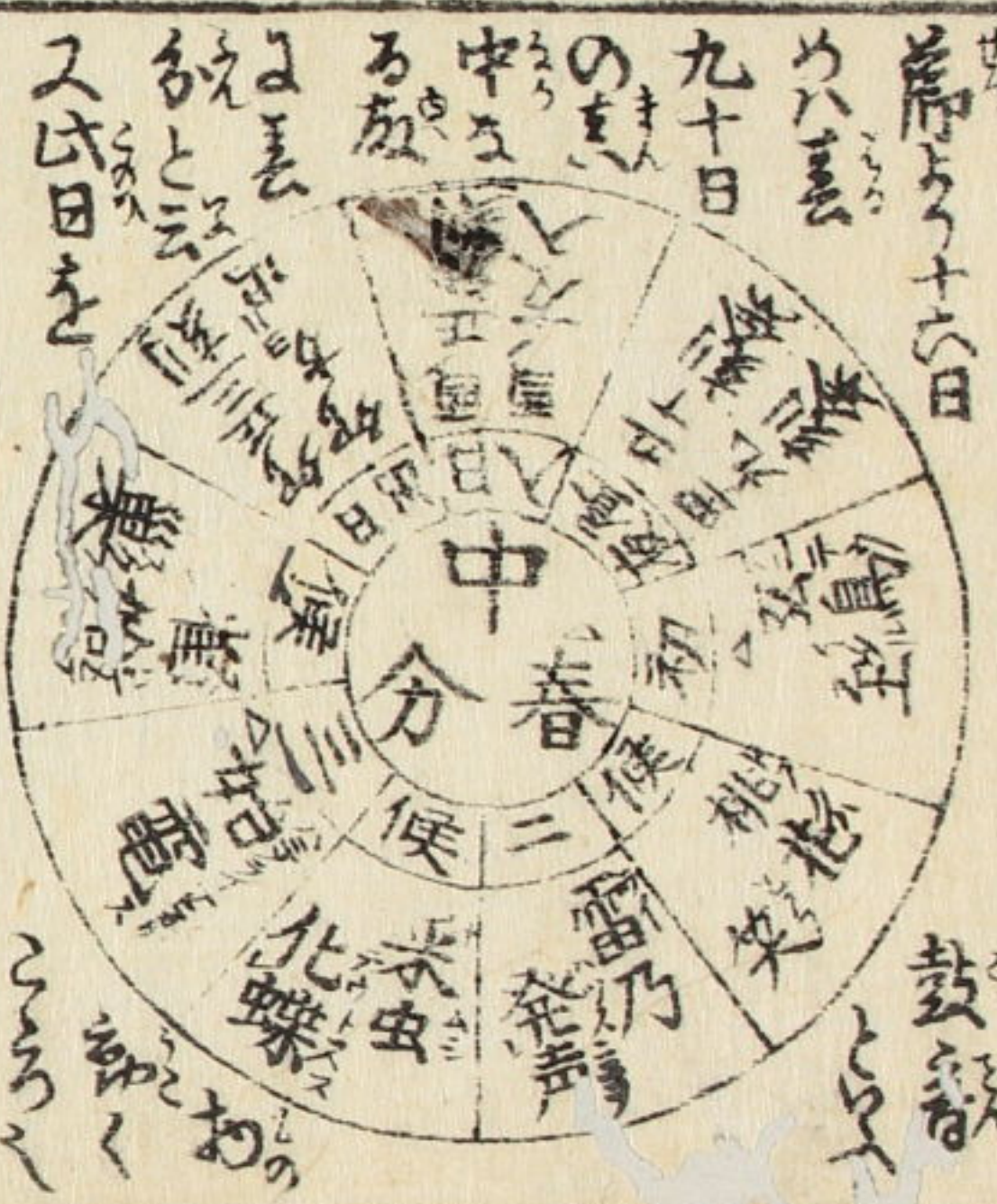
妙術 節の目る麻と門極之か  
の下に考付まらぬ

節占候 雷あれはまの雲  
あ大く中旬に雷

是ハ未だ傷入下旬雷あれ  
蟲ありをりしと未中は鳴れハ

冬来から辰巳よかれはま  
いしあり新のが早あり

中 春分。七十二候。草木土候。日の  
長夜短長等しく夜に長す

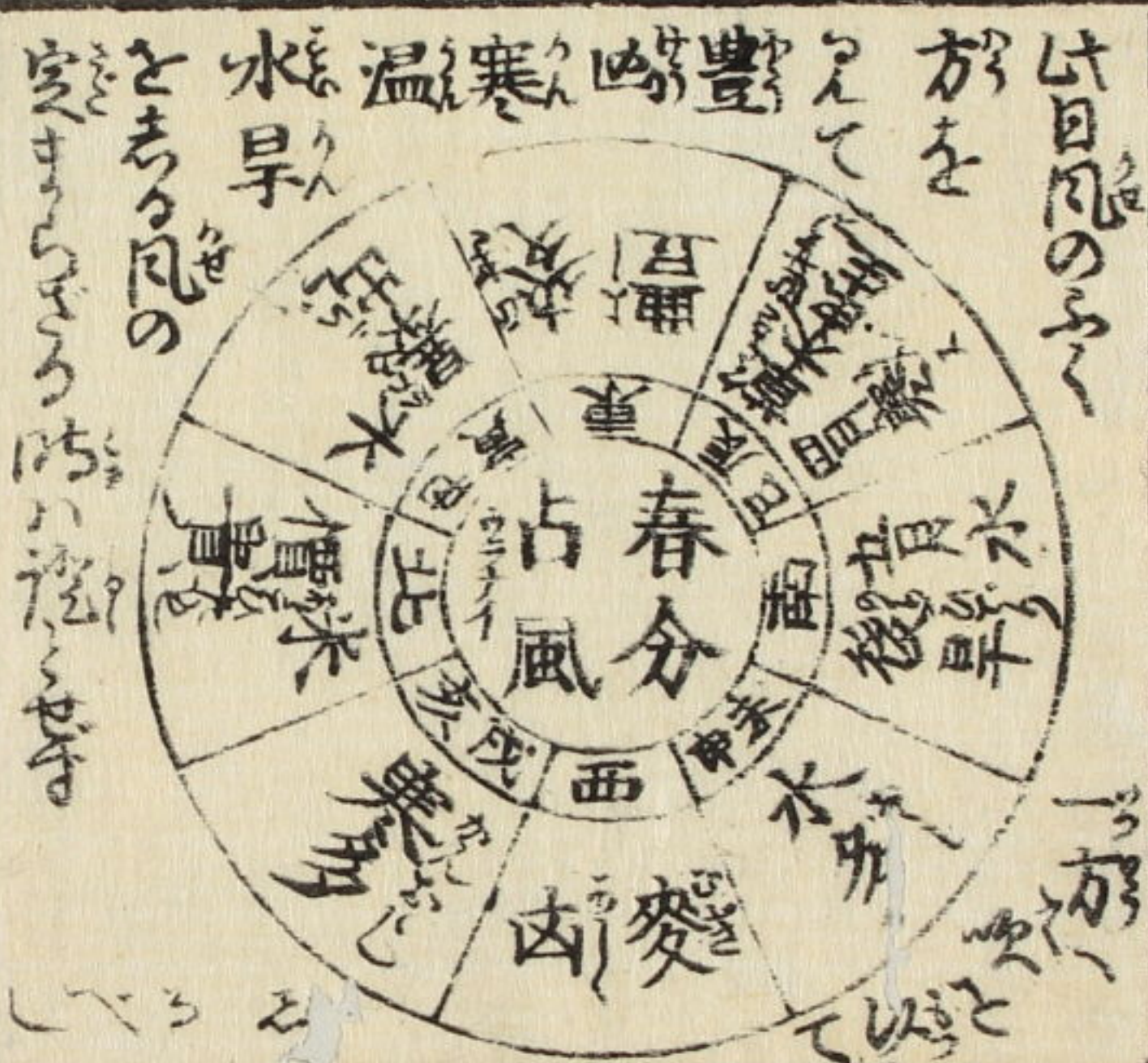


玄鳥のははぐりこまの社日に來  
 秋の社に降るこ布中に來りて  
 人衣に粟をひとひりこまを  
 ○雷声をぬきここの穀粟候を陰  
 陽相濟る感トて雷となり云  
 祭つらさ雷といひふを死を  
 電と云まハ陽に入るのこりり  
 夜をあり秋に陰に入るけりり  
 さまハ春まハ電は陰陽  
 の様と云ハ地ふありて上天ふ  
 然とるおこのま分は日敷のま  
 さまのじくは日敷の寒暖とこ  
 入ひに影まを敷あけし日の出  
 るまを二分まを陰し日入を考  
 まを二分まを陽とて時陰あ  
 けてせつはねま陽とこりり

春分 日考祖先を考るこ  
 分祭 考妣の死せり父母成り  
 先祖ハ祖父母よりこ上成  
 い父母祖之祖ハ我々の根幹に  
 なるべからん故日とい一年ふ  
 入日之四時と云日とこに陰ハ春  
 分夏至秋分冬至を考るま  
 林二時考るてまは日とい  
 一年に一日ふこ相倍これこ保  
 月といハ毎月日といた礼にあ  
 ごと春秋の考りハは年生れを  
 てはのここハ早秋候と候し

春 天候占候 老人星は日の  
 分 夕の正に陰れ

天下太平國世たるなり。春  
 花露の方の雲の中に雲を  
 かり青気存、これはお姿をか  
 死に友に安き、夜終るるこし  
 龍出され、春中、雪ころも  
 く、雲の、あ、く、氏、く、  
 雲の、雲、雲、雲、雲、雲、  
 雲、早、日、日、日、日、日、  
 て、雲、あ、さ、ら、と、月、い、う、り、ま  
 け、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 け、目、目、の、ま、ま、



日令

二月日の定まらざる時、此の  
 定まらざる時、此の図を参る

日朝 中和節

唐世、初春を中  
 初春を中、初春を中

中和酒

五日唐世、白官、  
 白官、白官、白官

詩 花隨春令發 鴻度歲陽過

獻生子

唐世、民間の、  
 民間の、民間の

を盛りて、相共、人ふ、あ、ま、ま、  
 人ふ、あ、ま、ま、あ、ま、ま、  
 あ、ま、ま、あ、ま、ま、あ、ま、ま、  
 あ、ま、ま、あ、ま、ま、あ、ま、ま、  
 あ、ま、ま、あ、ま、ま、あ、ま、ま、

上春服

唐世、  
 唐世、唐世

天氣占候

朔日、  
 朔日、朔日

行、貴、又、病、あ、ま、ま、  
 又、病、あ、ま、ま、あ、ま、ま、  
 あ、ま、ま、あ、ま、ま、あ、ま、ま、  
 あ、ま、ま、あ、ま、ま、あ、ま、ま、  
 あ、ま、ま、あ、ま、ま、あ、ま、ま、



妙術 朔日いよいよ日出てくる  
とれ遠志の心を去り

てせんどり二杯のことで又々たか  
だせば疲さうくふとたかく

無病ゆへに長壽をばらるるあり  
實に是神仙の奇々妙法なり

吉野餼配 朔日花供職  
法の兩行人

本堂へ出て御供奉幣  
廣庭ふさふさ餅をさうくする

南都 西京薬師寺造花會  
朔日七日まで金堂中

いろいろの遠く死と樹と大法會  
行々俗西京の死とさうり二

二月堂行 南都之水取  
朔日より十四日まで

牛王加持の修法あり上七日大像  
観音下七日小観音の勸る僧

修の僧といふる  
俳みちや養の傍の若れき芭蕉

大坂

天王寺六時堂修上會  
有朔日より三日追善ノ刻

上丁 釋奠

孔子とさうるといふ  
二月八月兩度あり

謚を大先至聖文宣王と申奉る  
ゆゑ朝廷より年毎に大學寮

して孔子をさうりまへと法はま  
ては孔子と教子とをさうり大宰

府つては孔子と関子騫と依  
るまじしより延喜式より文

武天皇大宝元年二月いよいよは  
まじしとなり後花園院寛正年

中々でゆきまゝ應仁の大乱より  
絶つて孔子は上一人より下萬民

至るまで天下萬世の師とされ本  
朝よりさうり終ひしやむべし毒

に次第に詳かりし礼記玉制と  
秋葉奠幣とありあは秋奠と和

訓よおさすなり

年中行事

二位中お

かゝるのかしこるはせらるるはて  
ひしをのめとらるるまらるる

①飯菘の補いそ味を教真 嵐雪

秋奠鳥の及哺をせり

野坡

詩 上丁詞

陸放翁

燎火明中庭老樹泣殘雨

○孔子マニシ神前ニ庭人マニシ 右ガガリニホト  
木カニルマニシトモトクニニキコト

白頭奉祀事 忍羅劇仰俯

○ワレラカコトキ白頭ノモニシニツカガリモヲキフ  
ニシオモモツルニキ

三終樂在懸 再拜肉外姐

○三番カクク下ウカカケテアリニカラナリ  
オカムナリ

誰言十載後 恍若到鄒魯

○カクニシハト聖人ノ生コクニシテウニオモフトハタ  
レモオモハナニダ

吾國雖編小大社 祚第土

○コノクニハイトカノ小サキクニシレドモ大キナル草マラ  
ツミテニツルコトシヤ

如何儼章綬 日夜苦蕪楚

○イカニツゲニシレウニシヤ 名ニシヤ  
○オモカク官人ノ印ヲオビテキヒシクコルルハ  
ツメニツルニキ

藏書如丘山及物無一羽

○五ノハ書ヲ山ノコトクオサシメノニ井テ何ヒトツス  
ノクニホトコサヌイニシヤナレバ

吾其可憐哉 去々老農圃

○アハレムベキモノジヤ五ノハコトワトメハヤメテ百姓  
ニテ身ヲムクサシ

初 稻荷祭 諸國これと

午 山城伏見のいさゝといへるハ元

明天皇和銅元年二月十一日

は山に祝ひて古曆を以て

考ふるれば日午と見五穀の

神されば稲神とも唱ふ山を

この峯と云本社第一ノ字を

虚第二素盞鳥尊第三大

市姫又田中社四大神併て五

座と云永亨十年三の峯より

今の地より移せりは日ハ洛

中洛外より群衆す市人は

黍粟等の種をうるはありひ

土人形とてうろは深草の名  
相さればなる古の抄と抄アてか  
さし海にけし人形とも抄アてう

哥 夫木

知衣

いさう山形のおと葉とらばは  
かへるにまろきり人のもろ人

後拾遺

惠慶

いさう山このまがきりちたき  
我おきこと我神もくくよ

頭伸

いさう山このまがきりちたき  
あまのくこのかきすりくま

延喜年月次第屏風初年集の画貫之  
いさうのまがきりちたき

いさうのまがきりちたき  
まろけのまがきりちたき

狂 初年いさうまがきりちたき  
社を化さるまがきりちたき

皇の勅願 此日くねまろけの  
年れ死難と除く草解とくま

佛 さいの火や水者清  
の鼻の先 ぼ生 京 真如堂竟  
内にある系

水間祭 和泉國水間觀音  
行基の他聖武天

京東福寺懺法 惠目山と号懺  
法のみに根

の罪と懺悔する 修行しは日名画  
兆殿司の画の觀音の像世三幅と

かくるし又十万の札とて火除の  
守とがすの紙と十万の字とか

いて寺内同裏巻よりいだし  
非 記者の像も懺悔よま福寺越人

摩耶泰 棋州免原郡畑原  
村山上よあま佛

母摩耶山切利天上寺と云天  
武天皇の御時法道仙人の創造

なうけ日恭詣の人の福とぼる又  
馬の無難と祈る土産もの昆

布と賣是と摩耶昆布と云  
山の絶頂へ絶景と摸播又四国の

山海一目にのぞき見ゆるや

① 榎原のそ乃もほし 平耶系都丈

② 系治の山の下からのぶるこされ

はよまやの観音のつゝ 湖春

近江本妙寺詣 今ハ寺院設  
たり旧跡ハ

三上山のほしよりあり今も初  
年より詣す而分れ皇と十二羽上行

上 南都春日祭 仁明天皇  
嘉祥三年

九月始て中臣秀基奏聞とへ  
て清和天皇貞観十一年十一

月九日庚申の夜初て行る其  
式は夜をたき 関白藤原家元を

① 揚州孝三首 顯仲  
表てん々いのらまてま日山  
松のささえしいやまこりほ

あめの下たえごとを忍いとも  
かすがのふれれとまつとも

詞 小車 南宮 三山

上 大原野祭 山城乙訓郡  
京より作置

許西の春日の社と日給る  
仁壽元年二月后宮御祭の

① 大原野行幸まどもありなり  
は正の勸請なりたるなり又

② 年中行夏 経賢僧都  
さけりてやり入れまうと一は心

とやうのそくよ花のさくも

伊勢物語

大原やと一はのふもくく  
外代のももねいひいづら

① 系毛車。むろろ。庭。ほむすれ  
② 大原を本も女にまねか 宗國

京 △八幡物部。神系あり伶人  
山井。多曲豆安倍まことと執

上 園韓神祭 古大内裏の  
宮内省有後

① 系議一人をる所に懸て事とけり

本誌報云  
非人曰これ其珠の事都丈

二不成  
踏青節 二月民俗酒  
とたづこつて

占候 二日雨あれば蠶桑工  
大まはし為水は早かる

迎富 携りこりの法因酒と  
郊外に出で弦歌

賜尺 唐制是日近臣  
牙の尺とたまふ

蠶農市 唐土蜀の國に  
二月二日台と両

萬神都會 二日とりよけ日  
夫婦のこを禁

出代 出替今日より未年二  
月二日迄と奉公人の期

とす京大坂ハ三月五日  
九月十日未年と期とす

行基祭 津の玉昆陽川と  
於に有行基建立

二日灸 俳言小豆煮る巫  
も二日の灸也 如泉

祈年祭 中災なく四時  
なほめんを祈る也

正行基昆陽院の雜末ハ  
延毒式日僧

云々延元二年將軍等成  
毒捨文有

正行基昆陽院の雜末ハ  
延毒式日僧

云々延元二年將軍等成  
毒捨文有

二日灸 俳言小豆煮る巫  
も二日の灸也 如泉

祈年祭 中災なく四時  
なほめんを祈る也

正行基昆陽院の雜末ハ  
延毒式日僧

云々延元二年將軍等成  
毒捨文有

二日灸 俳言小豆煮る巫  
も二日の灸也 如泉

哥 年中行事 長秀御臣  
いのつて世にのとながれ名が代を  
そとせあまりの神やうくらん

京 六波羅密寺に法盛の忌を  
行へ寺ハ鴨川東五條より

七 日 薪能 南都興福寺南大門  
四座の内二座休服座

うる尾とほくび十三日まで  
に入りてつとむ△是能くも云

能地うたひの燈ささるる能ハ  
余に薪の能のあり通し 其角

狂 春日の能の能ハ名うーあふ  
どぶひの能あいでうらうや貞折

春日若宮能 九日ふ南都若  
宮のまへにて能と

勤 十日も同し十日  
より十三日迄能と勤 八 今日白鬘  
日とぬくべし

占風 東南の風ハ水  
西北の風ハ旱也 祇園

八講 八講とは法花ハの巻の大  
意と論どる今ハ終る

九 日 遺教經會 釈尊の遺教の  
徑ハ系十本

釈迦堂大報恩もス八条大通  
ちうて終りハ十五日まで有  
是と△誦讀會と云

泉涌寺舍利開帳 十五日  
と云

祓人 祓人 貴船五穀祭  
係りくる

十 日 成 京 北山鹿苑寺祭同  
天神祭社人射あ

十一 日 列見 六位以下の藝能  
有とのと撰びて式部

兵部之二者よりほれ出ると上  
ゆる政官の能しよせを器置

容儀をてんるこ上つこ下  
けめ冠をかざりの花あり

非 列見や茶石伸と烏帽  
詞 百あはれがとれ彼とまきかたは

十日 百花朝 十日とかくいり  
新雨百花朝

台候 十二日天気快晴ある  
と久りりくの木

の實より一雨ふれりし  
大抵二月の夜雨をさくらめ

南都二月堂水馬大續松

二月堂八羅素院云天平勝宝  
四年沓門実忠建之と像に因伽

井有之と俗に若狭の井と云旨  
は井のあそ取て修法あり

垂麻ぞとむ都の  
南大法會 丁史 日 叶 日 紗といひ

十日 花朝節 百花生日とも云  
表は仲冬を去る

占候 は日と秋農の日と晴  
まは豊の月あり穀うす

蝶會 唐に花朝をもつて蝶  
と撲會とせしむ

替品市 は日かこの日果うり  
糸と化ととと被観す

涅槃會 涅槃像二月に  
△仏のふれ△さし佛

○は日釈迦入滅の日とす  
是八月の二にやまのあり物るよ

破形海に周の楊王五十二年  
二月十八日佛涅槃すと記す

周の二月今の十二月と云  
改めし○釈迦如来八十八思

教王と稱して抱戸那伽  
河の迦婆羅林の中にかこれ終ひ

まといふ其身ねん像といひ  
中にも洛東東福寺の像ハ北

殿司の画して日本無双の大像と  
◎ 後拾遺 意派

いふくこのころれのをにふ  
く入ればるる像ならま

◎ 今 伊勢大権

世とくらる月がれふし二枚巾

ありれやとよや入るまよひん

⑩ 陸のきこが世持る。右より。藤の林

⑪ 死よまよこまにさらけや花の時を

体業の賦と三三ればと人係 其雨

不とよとい候のたよ月夜抄 日

いろくに鶯鳴ららんねんの日揚降

⑫ 佛ぞよれは遠途のちがれや

ねと人係さかかけたけこ志相

雪果 仲まよの節はしていひ

依まよこ去る十五日二夜云

嵯峨 柱續松。今夜清系ちる

松の踊躍さけは親迎舞り

たる遠をとなり 戀をよこころと

⑬ 松の烟まうけそ嵯峨の花射流

山崎賢寺 親を系行基弘

法え三の係用帳

大坂 天まよの常系日徳く人の

倉式と常系舎とり人

南都 奥福寺と常系舎あり

金剛の寺ければ人係と用

常系とはれ 豊前 △豊山

はんといふ京田 旧名ハ日

子山かり老の 餅花煎火 又十

多根ともいふ

日小花くそとらしてしうのらひ

これとある花屑さう八條の扇を

十六 積塔 光孝天皇の御子

雨衣の皇子い盲人

どわいさきとてい 一十七日を

雨衣のやま子の市日日撤換

以下の丹次系多念後の小島

衆菴に集り接塔舎こ竹

京奉満寺 日蓮御帳あり

北極通鞍馬に

の南にあり担山

のく妙著真集 日就 峯定

寺観音會式 くらゆの

北六里づり

にあり大数山と号す白川

皇の御建まご一坊あり修驗



者なりは日国はげしけれ世  
に大慈山のあまなるこゑり

十九 貝寄 天王寺座の曼珠沙華

解る見成住吉のころりりり  
ちく日右貝まことの浦に寄る

ハ終外よりまきまきころりり  
は日の月と貝寄同ころりり

哥 續後撰 天教 前大臣  
今さくらにたまたまこころりり

貝寄や林に青ひあせぬ千那

観音誕辰 は日と祝の  
日とす今十八日

廿二日 浅間祭 信州浅  
間嶽の

今二月廿二日 八日に山  
はとひられた日とすころりり

〇説ふ三月廿二日 駿州菅原郡浅間の社  
重の祭あり是と浅間嶽の

青果あり社外に表と裏あり  
能くらくはるるの砂畑 乙由

廿一日 普賢菩薩 新き初ハ  
博多金を

廿二日 大坂 天王ら  
人衆ありとす

聖徳院と云廿二日を子の像  
國華代六所堂たりと云一舎村

二舎村その傍に流るる水あり  
堂なるの音に流るる水あり

鈴よりあはれ入ると流るる水  
の糸かくはらうと事天下に

教はけし寺年中の法舎の  
仲よりけ日代第一とす大なる

花舟を流るる水の世偶に  
たつる廿一日試承あり

哥 保氏仁系  
かり人の種らるること

非 摩訶舎利 惚とす  
依摩訶舎利とあてまはるる

瓢水

① 我々の風しめぬぞ聖天令毛臨

② 天まらの樂成すて 表よ未

何となく面ふそらにさしひま

金ふ糸井勉土退屋

太秦廣隆寺 舒武志

京 後鳥羽院在年加松

西蓮の書いばり 四北

近江 長

白鬚にたる桓武天皇十

又奉に修け日必と日必あり

秘の往來とかくきんどう

③ 後よ八條の月が帯霞

日五 京 山社△天神所

廿 天曆年中山社社之建

供これと△茶控の帝供云日

右禪院に八講あり公奉根源

日二月廿五日天曆大自在天

神のかまありて

善の表ありてなるお院天仁

二年より右禪院おて八條を

菅家の表ありて是とこれ

よく奉給え釋大仁匡衡曰天

信自在天神いあるひの天下に

徳樹一人と補導し天上

月日こしと善表と隠し

総中文通の大徳凡月の執

元敷山住心院の徳心教信

都は聖堂に於て徳言と信

或は人とかうてあつらふと

云ふに氣のりの相うのなる

あるらんと付られたるは天神

威ありてふふ持るふの志事

水の巻外浪のを二巻と掛け

たまふとる人それうろ

中又傍のやうに成た

て、ゆふの空とらう

或曰是時... 信とて... 水有

河内 通明寺 威徳 通明寺 多う今日神自他の本像

無性及志貴教土昨村放は土 昨もこの入代く凡傍位持より

推古帝の勅取聖徳太子の御位 たり天神の御社はちう天唐元年

天井と云はれり... 六廿八廿 日就滅日 天

和の節 天の御位... 天の御位

月令 二月五日... 彼者

二月五日... 七日の... 併氏号て中月とい

二月五日... 彼者... 此に比して比者といふなり

二月五日... 彼者... 西ふささるる...

二月五日... 彼者... 曾西ひまのひさささるる...

二月五日... 彼者... 南無阿彌陀仏の姿...

二月五日... 彼者... 詞様。紅雲。種まら。入日。花...

二月五日... 彼者... 能々たちひたりち守彼者支考

二月五日... 彼者... ささささくひとえいそのひささ

二月五日... 彼者... 狂ころりかろろ十刀位土あまよ

二月五日... 彼者... かのきくも志くぬき...

二月五日... 彼者... 林道春野... 或は... 泉の説小枝樹...

二月五日... 彼者... 記寸生死... 友曰宜取七日修善業

これ春秋七日の事なりつり  
ともい事たりなりぬる砥平  
石の録は彼岸日本の風俗  
ありと委女く歳時記出さる

茶の子 畿内の流俗あり七日  
の間亡人の日あるべ

野菜の食類知音の人ふおら  
能彼岸金の茶は海で嵐塵自耶

○彼岸送僧 片力十村尺牘

我等亡母為彼岸中

先慈諱晨偶中彼岸

日以因之摘菜蔬供

會預設蔬齋伏乞王

靈あは付送市傍説

趾臨敝廬為修其冥

徑馳聞較夜以山路

福則存没均感賤价

九寺若芳心 謹言 奉瀆

尺牘 書替 上中下

玉趾 上宅杖 獅座 賤俗 上小伴奉告  
交。座下 飛錫 奉瀆 銀塵以報

彼岸 天王寺茶 彼岸七日の  
る傍切より

出で修し寸男女親糸と中  
ふし婦人の衣類とかがり裁一  
よ懸ひ出でまはとりの子  
るの教の山只糸よりよひし

排障も社ぬぎかけて彼岸が  
彼岸とけは涙と看む日とみ備山  
狂肉らのひんご飯あも毎を因て  
此ちの世宿とやれを應け一朝

同躰念佛 天王寺念仏堂  
みて修りあり

天字の名号として廿八菩薩  
の画像を承けて修しす平野大

金仙寺よりお来る又西門を極東の東門にあつること者より

其下にあつたり西海の合を親むる弘法大師もは西門

よて日想観を修したまひいまひがん中日の影をば

入石をたがまうんがためし俳むらうりまびくの老翁翁又

京 御影堂△時宗 踊念佛

又秋二季の彼を踊躍念佛あり申世こ来尼と携へたに

麻と制す御影堂△時宗と稱するち号成秋長光寺と云ひこ

そらに仏想と謝して余念なくれどりよ流るるのまじ

法に経みけいんあり

高 一遍上人

とねいんむねざらばおれまの法の乃よいんをたぐるんがそ

狂世いこれて善法の毎おそえてりへん教養確念佛 声可

社日 立春よりみつめの戌の日と春社と云のうじは

土の神とあうく土ハ多物とやしなひ五穀と生す春ハ農事の

よからんるの戌いのと秋ハ其長徳と報ごる意たう 燕ハ春社

日ハ春の社日と云る

俳 うへおやけをこ教よ恵め斜水

社日 共長 左傳曰共工氏子句龍と云遠遊と

好舟車のいころふ足の達とらふ病り足すとらふは能水土と

平く故に祀す社とす句龍と風俗通云脩とらふ

方壇 壇と築きて土地の靈と祀る豊饒といの

陳平分肉 前漢陳平里中の社の宰とる肉と

分事甚ひとし父老曰善哉陳  
孺子が幸たるや陳平曰嗟乎我  
と天下の宰からしめばまこと  
肉れごとし云々

治龍酒 社日よのび酒と云  
石林詩話よ出さう

社日よ酒とのめば龍と治と  
こつてからしめたる故なり

詩 兵部李鴻

社公今日没心情  
為之治擊酒一瓶

社美 唐吳越の俗必美  
と以て祀るとり

社翁雨 社翁はるる水と食す  
故に社日雨雨と云

詩 社翁ノ雨五言詞

幾點社翁雨一番花信風  
社日ノ雨ハ草木ノタマニハ父母ノコトニカ  
キテ中ニ一番ノ風ナリ

詩 社日七言詞

今朝社日傳針線起向朱

櫻樹下行 社日ハ女ハ皆ハリニゴトラ  
ヤキ鼻トモトモ花を行遊

男女嫁娶 周社媒氏の注  
陰陽交て以て婚

礼とさすハ天の時に順ふこと  
されば月婚婦よと云

紙鳶 春の風ハ下よりして上  
のぼる紙をこめて遊ぶ

俳 まね板やき成なる引張き  
秘ありこや運去抱せて忘る

狂 つりのつりまあけてくれぬ  
ぬエいさうしりくをかる

紙鳶 箏ハ琴ハ漢李鄴  
故車 宮中ニヲ井テ帝

鳶ヲツクリ線ヲ引風ニ乗シテ  
ノボス後ニイカノ首ニ竹ヲ以

笛トス風ヲフクメハ聲ヲナスソノ  
声ヲハヒクカゴトニ

東夷宮之遠近之量

漢高祖陳豨ヲ征スルニ韓信  
紙寫ヲツクリテ遠近ヲバカリニナリ

得子 二月乙酉の日巳午ノ時  
夫婿水地に居るを心懸む

初雷。初電 仲春に初  
めて起る

けいりや虫動くも一儀に虫出し  
と入雷のこり妻の博物をあり

古今集  
天のふらふらとちりちりかきこも  
ふりの中とちりちりもの

詞  
つらうも。とちりく。あつく。  
こま。おし。たま。

能  
かきかきには遠とちりちり左近  
雷や他のまのまのの 嵐雪

雷の姑とれやまの又舟  
狂おらふるまの又舟とちりちり

遊山  
ふらふらとちりちりかきこも

詩 雷七言對句 詩楚

響滿山河傾地軸 擊枯株  
木カサケリ

光乘風雨入天都 急雨過  
ニワダケ

三國英雄空失勢 對雷光  
ヒカリ

一鄉孝子為傷心 聽春雷  
ヒカリ

詩 雷五言對句 詩五言對句

山鳴喬木側 滂沱無所避  
大アツ

水激蟄龍飛 霹靂不堪看  
イナツ

雷電 人君之象 雷ハ二月ヨリ  
百八十日ノ間

二地ヲイヅル即萬物モテタ  
地ヲイヅル八月ヨリ後百八十

日ノ間地ニ入ル万物モニク地ニ入ルハ  
害ヲ除キ出レハ利ヲ興ス人君象

**雷櫃** 陳ノ時蘇紹ト云人雷櫃重井九介十九モノヲ

得タリ宋ノ時沈活震木ノ下ニテ雷襖ヲ得タリ斧ニ似テ

孔ナシ○時珍曰雷書雷神ノ佩ル所ノモノニテ其落ノコリタル

モノナリ云々

○本朝ニテモ雷ノヲ千タルアトニテ異物又ハ矢ノ根ヤウノモノヲヒロ正レテ諸書ニニエタリ

**雷除ノ守** 越ノ白山鶴也

有其ノ處と畫ニ持サシバ雷繼之のガクク九ノ是あり

○後鳥羽院御製

白鳥のねは本はよかく



**候霜** 霜ノ日より百八十日

之又秋雁也めてゆより来る日也十八日ものねより

**氷口祭** 掃ハカクにあてられハ枯る故農人苗

代水とて入る口を氷とて其水湧るれハ苗瘦深るれハ苗腐八九

日と後て苗くハ一もふもよけもハも沸とてより一其水

の冷暖をこれよりて氷口とあらくてもととと考へらうま

はるハみ十串に幣さ一はさしてあはよさすなり

○夫木 師光

ますらとらうまのうふいくまこそ水はまらるやどいまふなり

○非 あはのふ十串とのたは許六

**田畑野山を焼** 芝焼 旱を

ハ地と焼て移る雨あり是を火米といふ和名やつくこといふ



て焼て後耕と云かり又田畑  
と云かり山根と云かり  
山と云かり山根と云かり  
山と云かり山根と云かり

哥 古今 業平

萬葉

をどりのまの太舟と云かり人の  
焼と云かりぬるも我と云かりや

能士と云かりせうと云かり  
能と云かりや雲の南と云かり

烟燈と云かりのれと云かり  
狂やと云かりあふと云かり

此部小の二月一ヶ月の  
草木のふいとありむ

季御讀經 二月八日に内裏  
中

此部小の二月一ヶ月の  
草木のふいとありむ

草木

此部小の二月一ヶ月の  
草木のふいとありむ

苗代

先種種の俵と云かり  
ると川と云かり

取巻鳥と云かりと日と云かり  
苗代と云かり

哥 夫木 俊成

たのりなと云かり川と云かり  
と云かり

拾玉集

長なり山田の妙ハ苗代乃  
あまのこゝと云かり

堀川百集

又後せ小田の苗代と云かり  
たぬすと云かり

運苗代と云かり木と云かり  
苗代と云かり

苗代と云かり林と云かり  
水邊と云かり

狂と云かりと云かり  
繩と云かり

苗代菜黄 二月突熱大  
小巻のぬりと云

哥 夫木 苗代菜黄

小山田の苗代々々のまゝにて  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

非 菜黄のまゝも秋とをきり苗代田天川

種浸 菜とくゆるに先被るの  
あはれをあらにひき被

岩後より出く種と下す

詞 たい仗 △ 種を色 種を色に  
なかり

哥 千首 為尹

種ハヤのまゝのまゝの苗代  
たぐいとちらの苗代のみ

種井 種と浸る井と名づく  
哥 新選六帖 為家

乃まゝのあせのかくひいあはして  
たゝ井のなぬへやまはまゝ

非 ぬかぬの本は種は種井かまき

湯種 農人種とぬる湯は浸  
てすけはまきぬきすと

又浸たる種と火のかくまゝ  
あぐりるもまきす

種蒔 △ 種じ △ 種匠

哥 夫木 國信

翁のまゝの苗代々々とあせおきて  
入るを種井に種下しはる

非 種下しはるを小柄が其角

藍麻蒔 麻あひのあきつれて麻蒔  
麻のあきが 苗蒔

葺 異名 紫塵初けてまふる  
まのこれと合らふ小兜の葺

の曲るやうにまゝあるなるが  
してまゝとひくく付ハ鳳尾のま

高三匠まゝもまゝ入其根菜を  
皮肉接ぐらして再三たぐひ

新法法とれハ葛粉とちらぐ  
用ゆるなり

詞 まゝのまゝのまゝのまゝ

哥 新拾遺 まゝのまゝ 和家

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

哥 万葉

若くは垂あの上はさわらひハ  
もえ出るまよなかりたり

哥 丑槐

山道のなごころびもたれて  
かぞへまの又年もほごころり

詞 かきこらび。こがらび。さわか  
らび。おれ。小井心。かきこらび。のい

連 ひうさねのちとすゑの歳也絶也  
さつらびもあそぶのね。うま。玄仍

俳 おまらびのやまやあぢの先 蓮二  
あまらびのいらぬ袖の内

狂 ふりあげさむらひこがらびのあま  
まごころりすまごころりびめ人遊山

詩 蕨 薇 詞 杜子美

雨足空山が 蕨 萌 春 深 蘆 壘

蘆 壘 紫 金 莖 雨ハレドモ山ニ未ダワセ  
モ、エイテ子氏春フカク

ナリテニヨキトハル一 紫金莖ハソセノ名ニ 伯夷不食

周家粟味必先知此味清

昔の美カ首陽山ニカクレテワラヒラ  
喰ノメタルユエニ今も味ヲシルソレマ

アラストナダテ アラストナリ

詩 蕨七字對句 詩 礎

承露未開仙女掌 元無骨

擎天先出小兒拳 已作拳

口中藥 ワらび薬キミニミあり

あやさるが昆布の石付薬やま  
まを合せて術まほくを合てぬく

両脚之藥 さらびの粉をゆるり付る

蒲公 異 僕公盟 蒲公丁 黄花

和名 ふぢな つぶさともいへん  
不つととと云より出るるるべし

哥 花さくも人やいさめのはらみ草  
若くは世のまよとれとて 公通

俳なんやほほ一うきよのきき  
しゆ袖う縮えらるるしゆ野岐  
在なんほほきしよめとれ献まど  
えはく経とるはしり 左又

**杉菜** 上子のたけを葉とて  
るどり入或ハ形土子に似

て別よとてとてとつる叶ありともハ  
大和を料曰ふ故に似る故よとて

哥 藻鹽草

かこのまけがさのけしひより  
とてとるまのつくり

俳さうらびもとてはる葉か言水

**狗脊** 大さうらびの根大  
の脊骨のどくぶくの

かさちわらひは似て味はふるる  
大さうらびと名づくなり

異名 尔紫蕨の蕨。迷蕨。

俳狗脊はさうらびのうの二さじ 春理

**枸杞** 本叶に白枸杞春ハ青清  
子と名づく多ハ枸杞葉

と名づく秋ハ却老子と云をハ  
地骨根と云の地骨皮と云の根皮

**枸杞** **逐犬** 朱孺子幼ニニテ道士  
王元正ニツクツ出敵ニ

据テ一日水ヲ汲ケルニツク大ヲ見ル  
孺子是ヲ逐フテ枸杞葉ヲ生タル

下ニ入ケリ是ヨリ是ヲ服ニテ  
仙術ヲ得タリ列仙傳ニ王玄真

ト云フナリ

俳枸杞めいと書うらほ杞死防瓢音

**痔茶** 枸杞の根つとらら  
茶とて煮へば一病と治す

**五加木** 異名文章神。八角茶。五佳。  
一葉五葉あるとてはとす  
若葉とてよく食用とす

俳若葉の腰のて居る五加木飲甚枝  
都てこのまも多五加木飲甚枝

**虎杖** 酸桶筆 酸杖。皮とす  
合ハ味す右に名付ニオ

高草丈余のおあり夏秋花ありとす

麗杖 **淡路宮** 日本紀反正天皇  
淡路宮三生シタマフ

井ノ水ヲ汲ミテ太子ヲ洗フ  
時タチヒラ花オチテ井ノ中ニア

リ故ニ御名ヲ多遲比瑞  
齒別天皇ト申シ奉ル

狂日カハ扶クハ侍クヒヨク  
かたけてもとる所の虎なる 桃綺

**葦** 異名 長生葦。翠髪  
和名 古美良。美良。萬葉集

中心莖を抽きて白糸をひらく死  
生のものとしこらうといふ

取ひひの入ると出す 生よらの

けと能ふ合せ耳へ入まてひひの  
かゝるゝとよそおさるべし

**蒜** 異名 美菜。卵蒜。和名  
比流。蒜。ふハニホヒナリ

ハニクムノ心之香ノ野蒜 皆食之  
臭ユエ名ツク

故事 **倭御尊** 日本紀景行天皇  
皇第二御子日

本武尊 剽夷 征伐シ玉ヒ山海ヲヘ  
テ信濃ノ山ニ入既ニ峯ニラヨシテ天

ニ飢ツカレタヒシ故ニ山中ニ御食  
ス山ノ神コレヲ見テ白鹿ト化シ玉

ノ前ニ立テリ玉アヤシミテ一ツノ  
蒜ヲ鹿ニ彈カケレバ眼ニ中ツテ

死ニケリコニ控テ忽道ヲウシ  
ナヒ出取ヲシラス時ニ白狗来テ

玉ヲ道ヒキテ出ル  
コトヲ得タニフ

**源氏品定** かくこのをねあ  
るむすめはちこりて

ちあられらるむすめはこれに蒜をひて  
ゆれし其香はうせな人信ふらうり

たまふといふをかくかよのうらるるひ  
るこくまきよひるやすくせといふら

あや **薤露之歌** 齊の田横カ  
門人歌ヲツ

二月 卯  
クリ 薤上露何晞明朝還復落  
コレラ薤露巷里ノウタトイヒテコノ  
人ノ葬リヲオクル時ニ  
ウタフタリニナリ

**夜雨剪**

郭林宗友人ヲ見  
テ夜雨ヲイトハス

非ヲ剪カテ燧ヲラツク今  
洛人コレニナラフ杜甫詩ニ

**詩 夜雨剪春韭**

非ヤイヤハ裁ウラ出タル地ハ野坡  
韭摘ニ陰香の匂ニふるこりれ 言水  
地ひろせへま本の傍にも春韭 芭蕉  
狂徒といひて於てあつらんうの  
條うにらん白くなりたり 平田

**妙藥**

瘡藥 はんく 三羽  
右橋合せて

一九くくみの肘の内らうく  
ア解さくべー男は左り女は右の  
疔ノ藥 地ひろまやま坊テの  
肉こそぬりけり

**薤露**

り 死せんともん  
大いんく 五ッ皮をさきぬの  
不とうのあつさ士一愧にすま  
ませ汲豆のあららるの澤さう  
は中へさくくべーぬまう

**膈藥**

地ひろのま子て熱の白

子ををー 撈ーと利也

**交韭蒜**

とくひては中のおひひ

を去るうはほふよき酸をじ  
かしてはさそくさとして



**水芥心摘**

一名 解菜

○三才園會にあらひひ  
あり葉をさくしとさうり  
後あり。深高。深橋。水葱  
とも同名別種なり

**哥 万葉**

大伴宿禰

まを夜ことかの里のうんこな  
苗有るのうーさうり

水葱指とな名性もよ初ん 半月

薺花

（異名）護聖草 三線柳  
こり入花白く小児は

草の莖とくにうまふに引張  
ひけバ三味線の香はう花の根のじ

（哥） 家集

好忠

庭の面うたがうの花のちあふと  
まゆも清ぬるうとさふり入

（俳） ようとれがまづま花咲根却芭蕉

（狂） ひくころう二味せん茶の名こころ

やうなとこをたけはなぬあ鯛一

菜花

菜のうはかたうス菜  
たぬ（俳） うの葉を敷し連二  
はらうちのな

大根花

（俳） 大根の花さき 田方  
花とるはらう



鬘草

（俳） 髪を掻め下  
さく若をれ 舊堂

末黒之薄

袖中抄に竹の  
根をさとり入

一花よとここのまふのまのま  
とら入しりり

（哥） 夫木

下のえのすくろをらう入まよこ  
やけのくすれまらうまらう

（俳） まらうはらうすくろはらうはらう桃書

草芳

萌ゆる草のやほく  
あらうとらうか

（俳） 芳くやいさの心のを解きて才磨

（詩） 芳艸之詞

文選抜萃

芳草生兮萋々 王孫遊兮不歸  
（詩） 芳草七字對句

情如芳草連天碧 穿蒼陌  
（詩） 情如芳草連天碧 穿蒼陌

身似楊花盡日狂 如有情  
（詩） 身似楊花盡日狂 如有情

草若葉

若草といひて

正月の季より 長ト

たるといふ△菊の若葉△鳥乃

ワカ葉△秋れまら葉

（俳） 若の葉はあつたのもたれを 某

完帳のねむりや神の宗 支方  
愛ふ遠坂のやんとさるるあま

萩之焼原 萩のどくろも  
つゝ萩の生ひ

初ら黒き芽あり是と焼や  
つゝ其外説いろくあり

いもどきけむびらりあつた  
爰ふつゝねさひまの力を

燃谷と心得てより一むく  
新千裁 寂蓮

まゝあつたをみ 井邊のうぐい  
くぐりけさるささのやけ

能焼くもたがぬ萩のまき果 雷安  
あけのちや神楽のあけぬの 東鐘

芳角 芳の推へ角祖 芳章  
萩の霞のせんとうり

我らし耳さうゆあつたの  
あつたをせつあつたへ

連りあつたをせつあつたへ 絶巴  
能焼くもたがぬ萩のまき果 雷安

角せらぬの巨匠あり 退春  
かごうかたあつたあつたの

狂かごうかたあつたあつたの  
りともうれたるかふの所 左久

詩 七字對句 野相公  
紫塵嫩 蕨人拳 千

碧玉 寒 蘆 錐 脱 囊  
アキハキリノフクヲ出タルニ

艾摘 通信達 字を月も  
なう制法よもももも

又食あつたあつたあつた  
家集 好忠

あつた小田のこをけねの  
今ハまもつたこをけね

夫木 俊成  
かごうかたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

百人首 實方  
かごうかたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた



⑤ 龍がげら 地を及ぶのよき 由水  
ふり袖のころれ白ひのよき 晩水

女薬 艾とくく 腹肚を洗は  
ぬに治す 傷病 ころりそ

若紫 (異名) 紫草  
目と向て用根の

皮を御布と洗う 昔よりりて  
衣と洗うし 是をささる衣と云

哥 伊勢物語

かまがけのころれひのすり衣  
まの人のみならかざりまもは

⑤ 狂 ちりれまむしはむじはむし  
されむりのほむさうりまら

接骨木花 主葉に花を  
つて花をまら

多敷十花 横接す 臭きありとま  
あて後まふあり本と接して打撲  
傷接と洗うて 切有ころり左三骨  
と接ぐの文まわら

⑤ 疝氣 疝の母に受ひ 疝氣は疝氣  
たつの本に其草をこせ今 疝

銀杏花 (異名) 鴨脚 花の色  
青白く二葉より花開

⑤ 紅梅 ころりおまはして香のこ  
香もふあんと似たり

⑤ 麗枝梅 和名ニカサキの花をけり  
まふひまら花一花にけり

⑤ 紫梅 和名ニカサキの花をけり  
びとけは腫う花とまから守

⑤ 服梅 花大じて花にけり 二月のま  
花はくまは地味口の地味本より

⑤ 新千載 元補  
言このころりやまこれ花梅の赤  
くまふれと白ひのころり

⑤ 新後拾

ふりかゝる指のちのちあけぬ  
とれる井ろすはぬぬらぬ

◎ 後拾遺

元捕

梅の花香はるる白く  
うしろこくこくこくこく

◎ 家集

道達院

梅の花紅くはるる日影  
か面の香へ枝にきけき

◎ 類類

紅梅連

雅世

まふらふと新緑の梅のねを  
為くは梅咲くこくこく

◎ 朱の唐。紅のち。こくこくこく

林の本末に梅さるる由り  
つひこくこくのいろ。おのこくこく

◎ 紅梅の巨樹のさきさき  
紅梅に思ひをたぐふ老ひか衣角

◎ 狂まじくあはゆる梅のさき  
花まらふよほそをさるる

◎ 紅梅詞 貞柳

路入宮家百歩香隔簾初

識漢宮粧

三子ハタノヨキ屋ニハ  
テ装テミレバ紅バイ

ガアリテ其ハヨツホハニスラハ  
テ、見一ナルガ漢宮ノヤウナル

直疑夢到昭陽殿一簇輕

紅洗淡黄 昭陽ハ前漢成帝ト  
イフ王ノ解ア井タル

殿ナリ紅バイヲ見レハワソノ  
ハユメノウチニキタルヤウナリ

◎ 春半花終 花多應不奈

寒 春ハナハハナニ  
花ハワツガニ幾タリ

識渾作杏花香 城ノクノ人ハ  
今アコト花ノサカントハエ

◎ 紅梅五字對句

照溪如濯錦 嫩葉融紅雪  
隔嶺似流霞 繁葩前絳綃

詩紅梅七字對句

詩楚

春水薄涼燕脂片

香不盡

寒日晴烘蜀錦机

酒初薰

壁詩

蜀州郡閣二紅梅數株アリテ

サカニ開ク時一掃高キ鬢ニ

南枝向暖北枝寒

風有而般憑仗高樓莫吹

告紅梅ノ盛文

前庭

滿開

蜀錦棄目

邀士

人愛云の三人お招き

足下典二三僚

奠

外像奉掛連致お催

聖像 共暢觴詠之懷

持幕俟

尺牘 去替上中下と記と

滿開 芳發。芳妍。綿綿。明

媚 馥郁 邀士 吟客。佳客。

逸人 足下典二三僚 上 公典同

上 將驛吟筵 中 催寬興之會

欲試賞遊 紅素返本

梅下續詠之催趣喜々雀

三月 舞  
如例又さるる後中ひま  
躍 豈不登臨

尺牘 上中下 公務と記を

催趣 促遊。展懐。邀宴

喜々雀躍 快衆心 想甚依然

上 称快万衆 中 何喜如之 出景不

登臨 上 步而捧誦 中 詰鏗金

芭 上 入廣夏受奇瑣 中 馳

驚而容吟慰 中 参扣宜唱愛

馳使 介子。僕士 上 貴奚。

遽使 中 崑价。走力。銀鹿

八重梅 花の八重なるをい  
は月あけひく

狂 新波付の梅をさるる人とか  
けあり八重う七重を胸いひく

俳 八重梅や尾の 座論梅

花浅紅より葉多く実の枝

ぶるとは五顆むらがりてを

ありあり人のたれもさる座と

ありとふかたさるる

越中梅 花大ふりて向く淺  
紅と帯を流梅に似る

黄梅 迎春花といふ梅に似て  
梅ふくま(高三三三)又ハ

正月に開く故に迎春花といふ  
俳 髪も美に老ます有たも梅巻 貴

初櫻。初花 花は初は  
花は初は

早く咲く梅の惣名も初  
花は初は

三月草木の部ふくわい

哥 万葉 人丸

佐のほのほにえさる初花の  
ましえつらとさるにあつる

哥 續後 伏見院

嘆息をひるか山の花のまをこえを  
引遠にのりくる炭のあらしき

哥 新古今 家お

ちうらんらんさんさのへも花を  
たつたのふれおごうし花

待花 花のもとのひもすても  
はや花も嘆息とあふを

哥 家集 頓阿

とくさへて巴才の本の芽も春西に  
物ほまたまさふさうとらうら

哥 新拾遺 俊成

ふ花もやらんらひられこま  
まこてそそえたるまはあ月の

非 狂 狂まうまうとて待こまは花

本の下にまは 糸櫻 志たう

まうして鳥有 糸櫻 橋とも

いひ無糸とていつうけお  
こまひとくにさくかうり

哥 あすもこんきう柳の枝細と  
柳の糸よむすはちれり俊頼

非 狂 狂百すらしもまのたあう糸橋野坡

同 吹へ庭も掃りうへとまう北枝

狂 狂たくもこの庭に嘆なるとまう

むをんた後のようそとえらん貞大

あまのやこやもんたのやうこれど

今このいさど 姥櫻 莖短

いと橋の本端 姥櫻 花

密てまははあ老女の齒をたはばふ

非 狂 狂花殿といれりこの花 立甫

狂 狂花はとここの花のうらまの

花うらまのうらまのいお 左柳

児櫻 花白く花のうらまの

非 狂 狂ねんのもものい 一重橋 橋

せんせとくう 鯨花 橋

哥 狂 狂木 遠まおとらほはの橋花  
たひとくさるまのうらま

① 花て出る一をさ 彼岸櫻

一を接ぎると千丈 花の接ぎる所よく咲くは十日

おし春命のころといは花接ぎの

那接ぎなり那名をさす事作

② 花のうらとさた被る接ぎ哉目

狂言すもさきいしうられとや志の

すらんなるまいたひが人接ぎ貞志

熊谷櫻 の名を花接ぎ

種植 草木の接ぎまき植

やう接ぎまきといふをさ

接穂 異名 接頭。小篋子。

果もつれ枝とつぐこ二つよ

ちる君接の肥盛るる陽にひ

たるとさしほくへ接同ま

らに緩うす皮と骨とふち

がらぬ申すれすべし春分と節

とするゆまのりかじま

接樹とほげば酸をまき

に樹とほげば金櫃こころま

小櫃をほげば李櫃とさす

③ 新撰六帖 光俊

アもいふゆもと木の花は果

てく八重咲くは花接ぎ

④ 小刀のそれらで接樹印蓮

月影ハ接とはまなる接木由水

接ぎ樹のさおのさや花を金雨

接ぎにわくのぞく接木が堂

茄子栽秧 ますし植は疏葉

根におきてほさしてほひおけ

子をさけりこととぬくて大と

しろこふり一尺 西瓜撒

肥地は坑を不つ坑に接ぎ

にびくまうく苗出後根の下

土を種く盆のごとくして

多く種をいしてすけは血多し

種蓮 ころねと葉のげいこ  
るるるいさる泥を

栽 栽し挿 挿壓 本の下枝の土  
油と云 にらるるをさ

分きの目と入をたなられ土を  
其枝の上より本の方をかた土を

分本の方をかたに土をうけす  
あど時土の上をかくし次の

本木の方と切り九月下旬に  
栽し五月梅雨の時分根を生

たつものと知るべし今月木犀  
躑躅をよせほきぬといは

壅培 根本の土をや び糞水  
と合べし 石榴 梨 海棠

名にけし 充糞あり候ころし  
回糞より或いは馬糞を用し

挿木 此法ハ黄土と目 細  
未しとゆと多分に節

よくまよへ六七寸はくり地に死  
はきかためて枝を馬の耳ほど

にそぎ同し大ききころる列の  
木の枝を先穴とあけ其穴に

そきたる枝を五寸にはさみ  
水とそぐ陰地より或は上

おひをこころ一月と候なり枝  
に至りて根を生じたる後し

栽のべし今月日本に  
檜 栢 樅 丹 栢 羅 漢 松 海 藻 海

棠 山茶花 石榴 山 礬  
薔薇 黄 梅 櫻 等 し 採 藥 種

根 沈在中か 採種 はよく  
法 草葉を採る 二

月八月と用ひるからず  
二月の料の芽は八月の苗は

たうまを放よころに本記の  
よと茶糸いあし宿根ありお

ハ則苗生 生え ころる  
時取 根たりて ころる

修樹 葉樹の小枝 採種  
実といふと大きなる

葉樹の小枝採種  
実といふと大きなる





カ遂ニ歸ラスニテ死スツノ  
傳母コレヲ悲ニテ女ノ常ニ

ヒキシ琴ヲ塚ニモ子ニ千彈  
ケルトキタチニ千塚ノウチ

ヨリニツノ雉トヒ出ヅルヲ  
見テ傳母イヨクカキニシテ

琴ヲ鼓テ雉操  
飛操ト云衆ヲ作ル

**捕** 魯泰王中年ノ令トナル其  
所ニスミケル童子アリ雉ソノ

傍ニアレドモ捕ヘズソノ故ヲ問  
ハ雉雛ヲツレバコレヲ捕ルニシ

ノビスト答フ是泰王ノ政令邪  
ナキニヨリテ虫境ヲ犯サズ鳥

獸ヨク化シテナレシタガヒ童子  
コノ仁心アリコレニ異ナリ云リ

**燕** 和名豆波久良女  
異名乙鳥

玄鳥ツルノ色ニハチ鷲鳥鷲ノ聲  
鷲鳥鷲ノ聲鷲鳥鷲ノ聲

於波於波ノ聲於波於波ノ聲  
天女天女ノ聲天女天女ノ聲

○春來り秋去る其のたがはる  
と甚捷し直に翻り仰き

と人あまの葉とほたるさう  
と人あまの葉とほたるさう

○建久元年百首 定家  
ととれてたれんあまのほたるさう

暇やたくてほたるさうさう  
暇やたくてほたるさうさう

○家集 頼阿  
けまも古葉のほたるさう

○千首 師兼  
みだまのひまのほたるさう

○毎日百首 為家  
二月のさくらとあまのほたる

○詞 かるびすむ。ほたるさう  
○翻る。ほたるさう。ほたるさう

○翻る。ほたるさう。ほたるさう

○翻る。ほたるさう。ほたるさう

鳥鳴る。かたしぬ聲。こ。あし  
よけらるゑ。かこもかこも

① 運ぶの目とかなる羽の夢が宵相  
② 排にぞ下にててさか箱道。連二

③ 滝をふる孤遠の影。か。水  
④ 空をよとぬけ遠や社の。向隠

⑤ 山の傍に雲とくを入日か。其角  
⑥ けやといもま。ぬ。去来

⑦ 狂を里に。さ。う。づ。の。づ。ら。の  
う。つ。ら。い。さ。と。あ。て。や。あ。る。紫。笛

たてさ。ぬ。も。様。さ。ぬ。い。も。さ。ぬ。の。を  
ほ。む。ら。ら。と。い。い。そ。い。つ。の。舊。道

詩 燕之詞 白樂天

羽族知机社日来翻身尋

主人樓臺 社日ニハキタルヒルガ

還下度柳穿花去又来

其飛カケルイキラヒハ雲ヲオカミ雨  
ヲクミリ高クモヒキクモトヒテ柳ヲ

クマリ花ヲクハリテ 雨。翅。拂。殘

花露水一毛不沾地風

埃 其飛アツバサハ花ノツユヲハラヒ  
テ地ヲ吹ク風ハカスムトモスコミ

鳥衣國裏風光好

養子成時使帶回 鳥衣國

詩 燕五字對句 口上

風簾雙過影 夢遠鳥衣巷

再棟並棲身 心飛白玉堂

詩 燕七字對句 詩夢

羽翼不沾寒食雨 紅春雨

夢魂應遠落花泥 逐暮雲

燕 燕 燕子國 唐ノ王 柳海ヲ遊  
ルニ舟破板一枚ニ

取ツキテ一ツノ鳥ニ至リケル  
人來テ王樹ヲ見テ是我王  
人ナリトテ引テ宮室ニイザ  
ナイムスメヲ以テ樹ニメアセ  
ケル然ルニ其人三十黒キ物ヲ  
着タリ樹ニスメニ其故ヲ問  
テ是イカナル國ツ答テイハ  
ク鳥衣國ナリ其後樹家ニ  
歸リ梁ヲ見ルニ例ノゴトク  
ニツノ燕サハツル樹コニオイト  
カノ止ニル所燕子 石燕  
國チル一ヨシレリ  
山ニ石燕一リ雨フル時ハ飛テ  
イケルガゴトシ雨ヤム時ハ还テ  
石 屋高 詩經天命玄  
鳥而生殖高○高  
韋氏ノ妃鄭祿ニイノリ  
テ燕ノ巢ヲヒロヒ食シテ  
契トイフ子ヲ生リ  
後ニ有高氏トナル

王京紅縷

宋ノ女姓王京  
が家ニ燕巢ヲ

ツクル其子生育シテトモニ  
去ラントスルトキ王京ガ臂  
ニ集テ別レヲツク玉京紅キ  
糸ヲ燕ノ足ニ付オキタレバ  
明年ニタ其糸ナカラニ來  
レリカクノゴトクスルコト六七

避戊巳日

サクホキリヒラ  
ケ日ハ泥ヲフク  
ニズ廣義見ユ

負燕

元ノ元負三年又燕柳  
湯佐ガ家ニ巢ク或日

雄猫ニトラケル雌燕其雛ヲ哺  
翼ナリテ歸ル其後毎年雌燕ヒ  
トリクニ來リテ同巢ニアリケル  
一六年見ル人感号負燕云ケル

妙藥

淋病 燕ヒトコト  
あるよーて食入ベシ

便毒びんとくを燕えんの殿てんにまゐりて  
年とし房ふさ子こ等ら放はなつてしてしるまはりて

歸き鴈がん (異名) 陽鳥 霜信 羽書  
使者しや △今人の△いぬら

△山さんの△谷やに△木きの△葉はを△折しりて  
△風ふう呂り 杖じやうの△こゝろの時ときの本もとの△木

杖じやうとくくして△未ま久くの時とき△海かいに△以もて  
△とて△憂うれむ△る△時とき△と△く△て△は

△其その△本もとと△ひろ△い△ぬ△に△は△を△禁きんして  
△此この△本もとと△ひろ△い△ぬ△に△は△を△禁きんして

△故この△刺さ△新しん△杖じやうの△形かたち△に△出いで△し

古今 躬恒

△及および△も△は△て△ら△る△な△り△ま△ら△る△の  
△及および△も△は△て△ら△る△な△り△ま△ら△る△の

後拾遺 國基

△う△す△と△に△か△く△と△ふ△と△さ△と△あ△ら△る△か  
△を△あ△め△る△や△は△ら△る△く△り△が△の

家集 定家

△ま△の△あ△は△は△夢△の△ち△も△あ△ら△る△よ  
△た△の△む△の△て△の△い△と△さ△さ△ら△ん

△詞(詞)△目(目)△下(下)△は△は△ゆ△の△ゆ△を△の△の△を△あ

△運(運)△ち△を△ま△ま△た△る△の△送△る△折△れ△ 宗敬

△鹿(鹿)△う△ら△る△日△ふ△から△冬△は△あ△ら△る△ 紹巴

△有△も△ま△て△お△は△は△こ△こ△風△雲△の△日△ 宗養

△非△鳥△の△ま△ま△ぶ△ろ△く△と△何△百△里△ 蓮二

△咽△れ△と△打△ま△う△た△ら△は△る△る△ 嵐雪

△表△喰△へ△た△る△と△列△も△も△も△ 野水

△狂△者△か△ら△る△つ△ひ△も△ら△る△り△わ△は△方△の

△こ△の△あ△ら△る△へ△あ△り△か△り△る△の△自△折

△孫△は△似△と△と△思△れ△ど△す△る△あ△る△よ△の

△ま△ろ△き△ひ△の△ら△し△と△思△は△る△ら△る△ 紫笛

詩 歸下之詞

洞庭春水緑 衡陽旅雁飛

洞庭湖ノ水カ春ノ色ヲナス  
時ズニハアカ旅ダチテ衡陽

ト云処ヲサチタカクタクタルヲニニカクツ  
カヘルツ 差池高復下欲向龍

門歸 差池トツラナリテ高クトヒ  
ヒキケトニテ竜門ト云アタリニムカフ

◎歸雁五字對句

日上

已辭霜雪苦

玉塞情何極

寧羨稻梁肥

蕪葭夢亦稀

引鶴

引鴨

冬より春と

久くあつたり居る所を引く  
る○相懸徑といく鶴の功考

あつるの處は七十年に小多し  
十六年に大多し百六十のほして

引止ま入千六百年ふて形定  
る罷業を尚ふ放よを白一放

天よ白放ふ引止ま入食す放  
其喙長前に軒ま後指

経一夭壽量へくは是相撲宗  
長仙の徳建の飛時一奉千里

百六十年来て雌雄相視て孕  
千六百年よりいふこのこて

食とらるるま一聖人位よ  
あれハ別ハ鳳と旬に翔る

◎引鶴の意に方付つるらし  
市代も毛尾の滴のほけき

詞もろきまら落のあまを。  
なを井にすも。鶴の毛ごるも。

子とろ入。衣のつる。かまの  
いづね川。まがすすあべ

俳引鶴や心法の梅の三編文秀  
引鶴りまらこ氷も列る雪止

詩 引鶴之詞

寄跡合香舎淹情加樹林  
ツルガレキくノ官人ノ方ニヤシ

作ム樹林 長鳴如有訴狎俗  
ヨリモニサル 鳴クハ何ヤラ誰テモス

到如今 不添風塵色常存霄  
今ニズ 其サハ大空ニ井ルヤウ

漢心 會應王子晋接雨向嵩岑  
イツツハカチラス鶴スキノ子晋ヲノ

鶴の **林浦籠鶴** 林浦孤山隱

二ツノ鶴ヲヤシキフ 縦セハ飛出テ

雲ニ入テ多クシクシウニテ及

籠ノ中一カヘル 林浦小舟ヲウ

カメテ西湖ノ寺々ニアソクコト

常ナリ若其畱守中ニ客ノ

来ルコトアレハ林浦カ童子籠

ヲヒラキ鶴ヲハナツカナラズ林

浦カアソク所ニ来ル林浦コ

レヲ見テ **上揚州** 小説ニ

家ニカヘル 日人三人

アツニ各其オモフトコロヲ

イフ人ノイヘルニハ揚州ノ

刺史トナラン人ノイヘルハ

室多ホシキ一人ノイヘルハ

鶴ニリテ天ニホラントイフ

其カタハラ二人アリテイハク

我ハ腰ニ十萬貫ヲ纏フテ鶴

ニノリテ揚州ニ上ラン

**化鶴**

神異録曰玄宗

テコレヲ射ル鶴矢ニ中テ西

南ニク時ニ益州ニ道觀ア

リ遊士ドモ一歳ノ間ニハ三

四度来テ遊ベリアル時徐

佐郷トイヘルモノ外ヨリ来

テ影子ニ謂テ曰我山中ニ行

テ矢ニアタレリトテ則其矢

ヲ壁ニカケテ後日矢ノ至

来ラバカヘスベシト云テ帰ル

**二客来弔**

陶侃傳曰侃

ヲヨニテ墓ノ下ニ在リ勿心ナ

二人ノ客アリテ来弔フ哭セズ

テ退ク促コト非常ノ人タルラ  
ニル隨テコレヲ視ニ雙ノ鶴ト成

テ去ル○右詩故事共引鶴  
ニカキラス鶴ノコトヲ記ルス

鳥之巢△古巢ハ樹ノ

云ぬ鳥ハ宿シ云独多ハ止  
と云衆多ハ集ると云○五雜

組ハいとく名ノ巢を供らハ  
其巧人ノことたり只一口西乳と

以テ結末其堅固なる事大ハ  
ふ本と按テ巢ハ終ニ傾トシ

哥 うの不安泣  
かひのうらなまのまへへはらの  
子のなうらうのなうらう

俳 ちれ巢はらして其核ヲ蓮ニ

孕雀はらこすけ子こ雀子すけこ  
又朽木に穴

巢ハてをまよと依シ其卵をたらあり  
其子にはまよるる故に雀雀と云

哥 新撰六帖 知家  
人はうた雀のひまのひなれつ

去はしもろとくともさうらえ  
○ 源氏物語

ひらさたのうらのねひるすま  
のまといぬきうねはさうらと

つることありこのかをあり  
隊子といふおの名よと云

哥 はへのいぬきうかひことあり  
たちありしやうしことありらん

俳 一足ハ孕すまめおの由り瓦遊  
雀もやあかりほまに外の後其角

妙藥 痘瘡の薬 生ら存の  
は痛とぬこと切て金箔又

お土まよ入息をけりあやさ  
とくあつそあつ用也

なん産の薬 すまめの巢と云や  
きは香白正根と云葛根格

十葉より内の田子の小使と  
あつてかききて用也

あつてかききて用也

腎茶 雀廿羽 氷砂糖一斤 酒一升 炭火をこせんやつて春の腎をこま

松茸鳥 着いたきいへぬたるも春松の葉を食ふ

哥 夫木

深山の香らるる葉をうらうれ来て新橋とつとくしねむいやくこ

能松むしる智もちとせう天女貞室

孕鹿 九の月より一子を産まざるの万葉に鹿

能花つまの涙の後の鹿 白羽の子のひとり三枕河のよりあり

鹿角落 角解ともいふの鹿生て三年して其角自落

能足弱の泣くらむや麻の角 潘山

能産すまふの後の産思麻の角 未山

妙薬 産後目まいの薬 麻の角と

はるさかこの薬 麻の角美柏山 抱子

とろろに粘しひねりかけては

妙術 舟の角とをうらうかよするの

蜂 蜂巣 蜜の巣の肉はたたくて冬食ふ

能まよらう出て花の蜜ととり蜜の

能しとけりて。蜜の蜂巣はしとす

哥 定家

らきて世とらるる色の軒にけり蜂の

とすうよなれぬいとくへも

能効學院蜂にあやまる年賀の

蜂の巢や二たかやうもさうと嫌 瓢三

素蓋鳥のさくれん蜂の巣が 支考

狂るつうおろうも何さ蜂の卵を

たんとすもふふりもこい入 加木

詩 蜂之詞

蜜蜂不食人間倉玉露為

酒花為糧 蜜ハキハ人間米ハク

ハス露ヲトツテハ

ケトニ花 作蜜不忙 採花忙

ヲ食トス



蜜成猶帶百花香 蜜トスルニハスニ  
花ヲトルハイソカシ

サテ蜜トナリニモ百花ノニホヒカアルソ

故 蜜糧 カクセシツカカク  
葛仙翁客ト對食ス客奇  
戯ヲ見上云葛仙口ニ飯

吐ク三十蜂トナリ又ニク ハニカレノオト

ミテ又三納ハ飯トナリ 蜂飼大臣

十訓抄京極大政大臣宗輔ハ山  
蜂ヲ何丸ト名ツケ飼玉ヲ故カク

号 空帝蜂 神寶禪師蜂窓紙ニ

アタリテ出ニテニ出ルコトアタ

ハサルヲ見テ世界カクノコトクニ

ロニトイヘトモ出ルアタハスト云

妙藥 治にせらるる  
蜂の巣と

女竹の葉をよみ一束にきり 三本より

あ三升入て二升に返用 乳の出る葉

心竹の葉とよやばに 妙術 治にせらるる  
蜂の巣と

たるに地は竹を二丙丁火と三丁と虫  
口の中よりイライ火と念ずると七通

はして其土を 人さす事 非 古虫  
とるぬるし 虫 死てこもさす 秘訣

狂 白くひつかなんごと同へハ枕目の  
をかこころんてかひしせぬ 蜂金

蝶 異 胡蝶 黄蝶 鳳車 野蛾  
採花使 粉柏 蛺蝶

右采花のこころんてく品 蜂の標

とくくひの化しあつりゆきれば

さハ其心の念ふ方のたれ

古 今 おの名をた 偏昭

ちりぬきハ後のあつらなる花を

おひあつらするまとい蝶くる

夫木 定家

る子あるころなれねはる言ふ人

朝露の梅の花のころんてハ

ころれもまぬく尾をたはひれて

まわれり蝶さすぬ蝶くる 正 仲

詞 といふ人。ちりぬき。まとい。初

蝶。花ぬる。花くはる。如

くの念ふて。さすのいろく

て人のころ。おねらうはし  
香とぬとむ。曉をやべる

運ころまのねよけたるの蝶蝶が

非夕名介町中に花の蝶々其角

非夕々々々の歌の蝶々其角

非夕夕夕夕夕夕夕夕夕夕山

非夕夕夕夕夕夕夕夕夕夕山

狂蝶くの神とてはかたれを

人もかたれくたつるまは迎 貞柳

詩 胡蝶之詞 東坡

双眉捲鉄絲 兩翅暈金碧

ニツノ眉ニハ黒キ糸ヲニキタルガナ亦

フタツノツハサハいろく色ノメクリア

ル十 初来花爭妍 忽去鬼

無跡 初テキタルトキハ花モソノ色

ハ夢ノアトモノコサヌカホ

ヨキコトハイタラトナルゾ

香鬢粉翅 暖争飛 品物

タミヤススアコトヒサス ヒゲツハサライロ

多情總屬伊 トリアタカカナ

空ニトビカハス春ノケニキハ何モモ

ミナコノ蝶ニケニキヲウハワレタリ

上國万家風月夕 樓臺取

次宿花枝 都ナトノ家多キト

トナレハワカヲモフニニヨロシ

キカタノハナノエダナドニヤトル

詩 蝶五字對句 同上

徘徊穿樹影 乱隨狂絮舞

ハイクイシエアウカウツ シヨニ

繚繞戀花衢 輕伴落花飛

ヨリヨリシテニシヨニ カロクククラトキニ

詩 蝶七字對句 詩楚

翅殘懶舞投幽檻 狂叟夢

力困慵飛過短牆 謝公名

蝶 鎮南異物志 二人

蝶 海南三序ニテ 蛟

蝶 三儿大井浦枕 上内ヲ分ルニ十

介ヲエタリ是ヲ 敬ハキハメテ肥美

三月三頂

唐穆宗ノトキ  
禁中ニ花開キ

ケハアル夜 蛺蝶 數万 飛來テ  
花間ニアツル 宮中 羅巾ヲ  
以テ撲トモ得ラズ 帝網ヲ空  
中ニハリテ 數百ヲエタリ 夜  
アケテヨレヲ見レハ 庫中ノ  
キンギヨクセニナリ

**愛花人** 長明 衞心集ニイ  
ハクムカニ 佐國

ト云モノ 花ヲ愛シテ六十  
年 遂ニ飽カスイハク 我生レ  
カハルトモ 花ヲ愛スルモノニ  
ナラントノ 詩ヲツクリテ 死多リ  
其後アル人ノユメニ 蝶トナリテ  
侍ルト見タルヨシカタリケレバ  
其子花ヲ心ノヲヨフホドウエ  
テ 其ウエニ 蜜ヲ朝毎ニソ、  
ギテ 孝養ノ心ニソナヘタリト  
ソ 孝心ノイタリカニスベキトシ

**莊周夢** 蝶タルヤカナラズ  
分チカタクアラシ

云く 是ヲ物化ト云 莊周 夢ニ胡  
蝶トナルサメテ 周ニサレトモ 蝶ノ  
周タルヤ 周ノ蝶タルヤ 不知

**蛙** 異名 石蟾 丁子蟻  
△蟾蜍 形大 色青 蛙 色青 蟾上  
△蛙子 一名科科 秋かけて あり

**哥** 夫木 家房  
こけろるる 夫とくよとむ 心比して  
蟾の 蛙の 蛙の 蛙の 蛙の 蛙の

**哥** 千五百番 家長  
ままの 千の 千の 千の 千の 千の

**哥** 新六帖 信實  
まの 門の 門の 門の 門の 門の

**哥** 家集 兼盛  
まの 門の 門の 門の 門の 門の

はあ又蛙の多し老より

あそくやうたふまの小山田

詞すだく。法多。川池に蛙田。

小田の蛙。あはれを。苗代あり。夕月

あ。心吹の夜の雪。あまきこし。

蛙と妻のをれらむ。あまきこし。

かまはきく。あまきこし。あまきこし。

かまはきく。あまきこし。あまきこし。

非我あは蛙鳴らえ西り田 蓮二

草也

角はこ蛙鳴、はの里は蛙 其角

狂序にのりた今まひてやよ

蛙 龍王海邊ニ

蛙ニアフテ問

テ云ハカ喜怒何如曰我喜ア

時ハ清風明月一部ノ鼓吹怒時

ハコレヲサキニスルニ努眼ヲモツ

テシコレニ次クニ脹脈ヲモツ

テシ脹リスギルニイタリ

テノキヤムナリ

毛弥

日本紀應神紀冬十月国栖人国建物

ヲ献ス此クス人常ニ山ノ葉ヲ

食ヒ亦蝦蟆ヲ煮テ上味ト

ス名ケテ毛弥ト云○本朝

食鑑ニイハク山東人蛙ヲ捕テ

熱キ湯ニ没シ皮ヲ剥キテカ

ラシ醋ヲ和テラ食ス唐三晏

群蛙ノ鳴ヲキ、テイハク此殊

人ノ耳ヲ聳スクス珪曰我鼓

吹ヲ听クニホトニドコ、ニ及

バストイヒケレハ晏慙テ退ク

晏六鼓吹ヲコム人ニ○宋書三

蝦蟆ノ膾見タリ○漢東方

朔カ傳ニモカハスヲ食フコト

見ヘタリ○淮南子ニ五月十五

日蝦蟆善ヲ作ルトナリ○花

史左編ニ百越ノ人好テ蝦蟆

ヲクラフ筵會アレハコレヲ

井堤蛙

袋草子日帯カ  
葺信始テ能因二

逢ニ時能因今日見泰ノ引  
出物ニ見スベキ物アリトテ懐

中ヨリ錦ノ小袋取出是我  
重宝長柄橋造時 絶骨

ト云テケレハ節信大ヒニヨロ  
コビ又懐中ヨリ紙ニツクメルモ

ソヲトリ出シテ見セケル能  
因トリテ見ルニカレタル蛙ナ

リトテ共ニ感歎ニ又  
フトコロニシテ帰リケル云

妙術

止蛙鳴 葺の未死蛙  
此ノ枝の葉を焼けて

鮎子取

東宝澄に青魚カ  
トコ 救のみハ

蒸鱒

差技裁前より出ル魚  
太く平塩を以て干して

法が、出るが、あつて合らふ  
非むがを平教ふは、其角

狂かきとのへ見とつろこの塩わい  
いよといれぬ味をよあれ 道鐘

田螺

田贏一名田青。胡麻と  
からしとをなむらり

非引るゆかに交るや田はを連二  
非引るゆかに交るや田はを連二

妙薬

赤眼江 湯法 田螺と六  
あぶ粉と白粉を加味せ

栗麴と湯法 田はの白を平と  
よくとろ松のみどりと塩を

はたると粉と一とととととと  
松脂と田はの粉を不ど加

うす粉をねるあわめ付  
蜷 異名 河貝子 蝸贏 螺 蛸

總角の結ひたるかとのこし  
たに肥お流法の倍ハアケキ云

非なよへのそり不ふこの蛇三  
産後後門破玉痛と治す

妙薬

産後後門破玉痛と治す  
はて付べしあ人もの痛と治す

いずれ葉 三月三日と二三夜解  
とまて後境のまきごとをいし

寄居虫 舟蟹 似て境のまきよ  
やぶるおんやごかり貝云

一名寄生 擬云朝鮮からん  
だの扱よ一二人のものあり

非 寄居の扱よ一二人は夏更亭  
かたよ凡島のうらみの寄居虫并乙由

狂 舟の上より海せよと  
宿さくろのかひひきり 信海

馬刀 養の如かる馬の馬が  
の飛まらぬまきよとまきよと

非 馬刀の扱よ三月は枕波 遣二  
海におて天なる馬の馬もまきよ千丈

狂 けいしとまきよとまきよとまきよと  
いふも後しぬひまきよ 宇羅

を海木 三才舎回入空不洋  
美鯛魚に似る

非 海木もまきよとまきよとまきよと  
けい良のまきよとまきよとまきよと

必用

はるハ三月一ヶ月必用  
ふまきよの法まきよとまきよと

破軍方向

夜九ツ	巳の方	夜八ツ	午の方	夜七ツ	未の方
申六ツ	酉の方	申五ツ	戌の方	辰四ツ	辰の方
辰九ツ	子の方	辰八ツ	丑の方	辰七ツ	丑の方
辰六ツ	辰の方	辰五ツ	辰四ツ	辰三ツ	辰の方

日刻

まきよの日の刻の別まきよとまきよと

出行作事 西南より  
ておくべし

壬の目をのぞくべし 甲庚  
丙壬のしとまきよとまきよと

樂事

見月とまきよの別と  
いひて民俗の別と

さきて時 ぬれぬれまきよと  
拾ひまきよと踏まきよと

ろびり松ハ二月末ハ大坂  
まきよとまきよとまきよと

まき 春風 柳 出る ごとく なる なる 酔に 乗る 暮と 惜しめ  
ある は たの 一死 あり だに  
たし まは 日 月 人 心  
とも 偏なき 樂事  
中 秋 の とき かり あり

天氣占候 是月卯の日

素問曰 丑に 風 吹らば 寒 熱 多し 子に 甲子に  
雷 あり 大 熱 なる 雨 あり 卯  
年 あり 月 ひかり あり 災 あり  
乙未 年 あり 秋 米 價 高  
西に 風 あり 蠶 糸 多し 災  
あり 月 あり 早 あり 月  
餘り あり 米 安し 災 あり

二月用之品 左り  
あるす

養猫法 養生とほし  
ぬす ぬす ぬす ぬす ぬす

花壇土 け月 花壇 土

製筆法 け月 三月 十日 まで に 収め  
制表 くる 筆 と 佳し 寸 毛 八  
九月 以後 取ら 赤毛 白毛 と 此  
は 寸 軸 竹 も 同く 其 法 切ら ず  
利 刃 竹 と 前 下 利 刃 竹 と 入る  
毎く 酒に 硫黄 と 入る 筆 の  
毛 毛 を 舒き 筆 の 根 毛  
果 多し 梨 木 榴 木 等 の 枝 又  
ふとも 其 外 枝 相 接 の とき だも  
の を さら さら け 枝 の 下 へ たり  
いす とも べし とも べし

雑品 葡萄の 加と 椒 幹 を  
あげ おく べし 墙垣 以 築く  
べし 百葉 の 樹 の 下 と 春く  
を べし べし べし べし

木の 皮ら さら ねし 社 目 あり  
の 柄 と 根 よ さら べし 提 出  
さし とも せし とも せし  
初 年 あり の 酒 と かけ べし

養生 二月天気が晴明の日と  
多し三里終骨に食

とく一陽をたさけおれと  
ふせぐ養に及にたり御を

衝心のやまひま一と香養  
叢書に及ぼる但突穴ハ其

人の病に及ぼるにありてある  
返右の二穴に及ぼるべし守

服神明散 言の後の神の友を  
佩べ一蒼木 桔梗 附二 烏

頭 罌 炮 細 幸 各 搗 て  
散 紅 絹 の 袋 に 入 り 人 此 れ を

脊 に 帯 き 六 一 家 病 ぼ り  
か 腹 あ ら け ら せ ら せ 文 を

假 だ て の お け 服 せ ら れ ば  
あ せ 生 て や ま へ 子 遠 に 愈

子 ぎ ま へ ら 法 け 月 丁 亥 の 日 書  
花 と 枕 花 と 陰 子 は して 搗 じ

戊 子 の 日 假 だ て の お け 一 日  
後 二 日 一 日 に 二 日 再 び

二月飲食 料理献立

禁 免 肉 け 月 二 日 鶏 卵 け 月  
忌 公 を 黄 花 菜 け 月 二 日 痲 痰 と 発 す

や ぶ る 陳 俎 け 月 二 日 痲 痰 と 発 す 日  
陰 流 水 け 月 二 日 瘡 梨 子

け 月 食 する あ ま く こと まで  
生 冷 ま する 物 と 食 べ ぬ 酸 物

大 辛 物 け 月 二 日 以 外 け 月  
氣 と 毒 性 破 る 菲 け 月 二 日 大 量 あり

料 理 汁 け 月 二 日 け 月 二 日 け 月 二 日

け 月 二 日 け 月 二 日 け 月 二 日

け 月 二 日 け 月 二 日 け 月 二 日

け 月 二 日 け 月 二 日 け 月 二 日



鱈 こい。かいりょう。いりざけ

白うと。ほくし あせ。あせ。あせ

指牙 あせ。あせ。あせ

二汁 あせ。あせ。あせ

吸物 あせ。あせ。あせ

和物 あせ。あせ。あせ

精汁 あせ。あせ。あせ

和物 あせ。あせ。あせ

和物 あせ。あせ。あせ

和物 あせ。あせ。あせ

煮物 あせ。あせ。あせ

和物 あせ。あせ。あせ

時魚 あせ。あせ。あせ

鳥 あせ。あせ。あせ

青物 あせ。あせ。あせ

梅花久野法 あせ。あせ。あせ

和物 あせ。あせ。あせ

和物 あせ。あせ。あせ

和物 あせ。あせ。あせ

和物 あせ。あせ。あせ

和物 あせ。あせ。あせ

は、搗破の瓶の上まを上げ、  
紙を入、瓶の入り口に紙蓋

して、人の通いざるや、  
用ゆる時、瓶にさしこみ、  
瓶を揺るがせ、瓶の口を

塞ぐ、入れれば、瓶を揺るがせ、  
瓶の口を塞ぐ、瓶の口を

塞ぐ、入れれば、瓶を揺るがせ、  
瓶の口を塞ぐ、瓶の口を

塞ぐ、入れれば、瓶を揺るがせ、  
瓶の口を塞ぐ、瓶の口を

塞ぐ、入れれば、瓶を揺るがせ、  
瓶の口を塞ぐ、瓶の口を

塞ぐ、入れれば、瓶を揺るがせ、  
瓶の口を塞ぐ、瓶の口を

塞ぐ、入れれば、瓶を揺るがせ、  
瓶の口を塞ぐ、瓶の口を

塞ぐ、入れれば、瓶を揺るがせ、  
瓶の口を塞ぐ、瓶の口を

塞ぐ、入れれば、瓶を揺るがせ、  
瓶の口を塞ぐ、瓶の口を

